

## 西藏文佛說大無量壽經

寺 本 婉 雅 譯

印度語、— Aryūmitābhayūha-utma-mahāyāna-sūtra,

西藏語、— Hphags-Pa Hōd-tPag Med-kyi bkod-pa Shes-Bya-Ba Theg-Pa Chen-Pōh-mDo.

日本語、聖無量光の莊嚴と名けらる大乘の經。

本經は甘珠爾部大寶積法門百千章即全集 (Fya maharatnakūta dharmā-Paryūya-gatasahā-srike-grantha; kphags-pa dkon-meheg (bkisegs-pa chen-pōhi Chos-kyi Rnam-Graus Leju-Stōi-phrag Rgya-pa P. B. 270-A.308) 全五國中第一國中收輯せる原典に據る譯者將來大谷大學圖書館藏)。

### 第一章

佛及び一切菩薩に歸命す。

(1)「是の如く我は聞けり。一時世尊は王舍城の鷲峯山に於て、三萬二千の比丘と、比丘の大衆と俱に住し給ひき。

「一切は阿羅漢にして漏は盡き、煩惱はなく、(1)所住を具し、(2)如實の智に由て心を善く解脱し(3)

有にまでの全繫は全く盡き、<sup>(4)</sup>隨て自己の利を得し、<sup>(5)</sup>全勝を具し、<sup>(6)</sup>調禦と最上の寂靜と、<sup>(7)</sup>善解脫心と善解脫智と全智と大象と六神通とを具し、<sup>(8)</sup>自在を具し、<sup>(9)</sup>八解脫の禪定と<sup>(十)</sup>力とを具し、神通を現かに知りたる長老大聲聞のみにして是の如し。

<sup>(1)</sup>長老阿若多憍陳如、<sup>(2)</sup>長老阿濕婆地土(馬勝)、<sup>(3)</sup>長老波瑟波<sup>(4)</sup>長老大名、<sup>(5)</sup>長老賢勝、<sup>(6)</sup>長老禰天、<sup>(7)</sup>長老離垢、<sup>(8)</sup>長老善臂、<sup>(9)</sup>滿慈子、<sup>(10)</sup>憍梵波提、<sup>(11)</sup>長老優樓頻螺迦葉波、<sup>(12)</sup>長老那提迦葉波、<sup>(13)</sup>長老伽耶迦葉波、<sup>(14)</sup>鳩摩羅迦葉波、<sup>(15)</sup>摩訶迦葉波、<sup>(16)</sup>長老舍利弗、<sup>(17)</sup>長老摩訶目犍連耶那<sup>(18)</sup>長老摩訶俱絺羅耶、<sup>(19)</sup>長老摩訶劫賓羅、<sup>(20)</sup>長老摩訶純陀、<sup>(21)</sup>長老阿尼樓駄、<sup>(22)</sup>長老悉達、<sup>(23)</sup>長老難提迦、<sup>(24)</sup>長老寒比羅、<sup>(25)</sup>長老須菩提、<sup>(26)</sup>長老離婆陀、<sup>(27)</sup>長老佉提羅縛憍迦、<sup>(28)</sup>長老薄拘羅、<sup>(29)</sup>長老善來、<sup>(30)</sup>長老不空王、<sup>(31)</sup>長老波羅耶憍迦、<sup>(32)</sup>長老槃陀迦、<sup>(33)</sup>長老周利槃陀迦、<sup>(34)</sup>長老羅睺羅、<sup>(35)</sup>長老難陀、と此等及び又他の神通已達なる長老大聲聞のみなり。一人を除くとは即ち學の道に進むべき長老阿難陀にして、又茲氏等の多くの菩薩摩訶と俱なりき」

<sup>(2)</sup>「爾の時、長老阿難陀は座より起ち、一衣を一肩に着け、右膝輪を地に着け、彼世尊の所に合掌稽首して世尊にかく問へり。世尊よ、汝の諸根は眞に悅豫なり、顔色は總て清淨なり。皮膚の色は總て清からにして、黄色の(光)あり。譬へば是の如し、秋の衣<sup>(梵語)</sup>は總て淡黄色にて清かに、全く清められたるかの淡黄衣の如く、世尊の諸根は悅豫なり。顔色は總て清淨なり、皮膚

の色は總て清らかにして、黄色の(光)あり。尊ふとき世尊よ、譬へば、是の如し、閻浮河の黄金百量を鍛工、若は鍛工の熟練なる弟子が火爐の中に投じ、善く精鍊して黄色の氎布上に投げ置かれば、眞に總て清淨に全く清められて黄色(光)となるべし。是の如く、世尊の諸根は悦豫なり、顔色は總て清らかなり、皮膚の色は總て清淨にして黄色(光)あり。世尊よ、我は前よりも尙前に於て是の如く、如來の諸根は悦豫なり、顔色は總て清淨なり、皮膚の色は總て清らかにして、黄色(の光)あるを觀ざりき。世尊よ、そは我是を思惟す。今日如來は過去と未來と現在とに出世の如來應供正等覺者の諸佛を憶念しつゝ、今日如來は佛の所住に住して、勝者の所住と、一切智性の所住と、大衆の所住とに住し給へりと思惟す」

(3)「是の如く問ひしとき、世尊は長老阿難陀にかく告げ給へり。阿難陀よ、善哉善哉。こは何の爲めに諸天は汝に語るや。將に諸佛世尊に依てか、將に自からの分別智に依て是の如く知れりやと。是の如く告げ給ひしとき、世尊に長老阿難陀は是の如く問へり。世尊よ、諸天は尙我に此義を發見せしめざりき、諸佛世尊に依ても亦(然るに)あらず。されど世尊よ、我自らの分別(智)の欲求に依て是を思惟す。如來は今日は過去と未來と現在出世の諸如來應供正等覺者を憶念し給へり。世尊は今日佛の所住に住し給へり。勝者の所住と、一切智性の所住と、大衆の所住とに住し給へりと思惟す」。

(4)「是の如く問ひしとき、世尊は長老阿難陀に是の如く告げ給へり。阿難陀よ、汝の尋(思)は廣大なり、分別(智)は賢にして辯才は善なり。阿難陀よ、汝は群生を利益し、群生を安樂ならしめん爲めに住し、世間を哀愍し、大群生と諸天と人との義と利と安樂の爲めに、汝の如來にこの義を問へる勇猛心は善哉善哉。阿難陀よ、そは是の如し。無量無數の如來應供正等覺者に依て積集せらるゝとも、如來の智見は損害せらるゝことなし。そは何の故に云ふや。阿難陀よ、如來の智見は無量なればなり。阿難陀よ、如來は若し欲せば、一施食を以て、若は(一)劫、若は百劫、若は千劫、若は百千劫、尙それよりも久しく住するを得べしと雖も、如來の諸根は毀損せらるなく、顔色は別に變するなし、皮膚の色は衰損せらることなし。そは何の故に云ふや。阿難陀よ、是の如く、如來は禪定の安樂の彼岸に到り給へばなり。阿難陀よ、諸の正等覺者は出間に出現し給へること甚だ難し。譬へば是の如し、優曇華の世間に生せんこと難きが如し。阿難陀よ、一切有情の義を欲し、利を欲し、哀愍を有し、大慈悲に住し給ふ諸如來應供正等覺者の世間に出現し給はんこと甚だ難きなり。阿難陀よ、若し汝は一切世間の彼の軌範師たる諸勇者が世間に出現し給はん所作(因縁)と、諸菩薩摩訶薩の義の爲めに、如來へ此義を問ふべきその思惟も實に如來の威神に由るなり。阿難陀よ、是の故に善く諦かに聽きて意に持せよと我は汝の爲めに説くべし。阿難陀は、世尊よ然り、と對へき。」



- (5)「世尊の(言の)如く聽きしとき、世尊はかく告げ給へり。阿難陀よ、昔起りし過去の時に於て、それよりも無數の劫波の尙無數、廣大無量不可思議なりしとき、その時代に於て、(1)燃燈と名くる如來應供正等覺者は世間に出でましき。阿難陀よ、燃燈如來の前の尙前に於て、(2)光有と名くる如來は出でましき。その前の尙前に於て、(3)光作と名くる如來は出でましき。その前の尙前に於て、(4)栴檀香と名くる如來は出でましき。阿難陀よ、その栴檀香と名くる如來の尙前に於て、(5)如蘇迷盧と名くる如來は出でましき。(6)月面と名くる如來は出でましき。(7)無垢面と名くる如來。(8)不染(汗)と名くる如來。(9)無垢光と名くる如來。(10)龍輝壓と名くる如來。(11)日面と名くる如來。(12)山王音と名くる如來。(13)迷盧峰と名くる如來。(14)金光と名くる如來。(15)星光と名くる如來。(16)吠瑠璃光と名くる如來。(17)梵音と名くる如來。(18)月輝壓と名くる如來。(19)日音と名くる如來。(20)散華嚴飾光と名くる如來、(21)吉祥峯と名くる如來。(22)勝海覺遊戲神通と名くる如來。(23)勝光と名くる如來。(24)大香王照と名くる如來。(25)離恨垢患と名くる如來。(26)勇猛峰と名くる如來。(27)散寶と名くる如來。(28)大功德持覺得神通と名くる如來。(29)蔽日月光と名くる如來。(30)照耀吠瑠璃光と名くる如來。(31)心流覺開敷現顯と名くる如來。(32)華環林王開敷華神通と名くる如來。(33)華藏と名くる如來。(34)如水月と名くる如來。(35)破無明暗と名くる如來。(36)世帝と名くる如來。(37)如眞珠珊瑚蓋と名くる如來。(38)希望と名くる如來。(39)法慧吼王と名くる如來。(40)

師子海積吼王と名くる如來。<sup>(41)</sup>海迷廬月と名くる如來。<sup>(42)</sup>梵音響現喜と名くる如來。<sup>(43)</sup>華生と名くる如來。<sup>(44)</sup>得軍と名くる如來。<sup>(45)</sup>日月と名くる如來。<sup>(46)</sup>迷廬峰と名くる如來。<sup>(47)</sup>月光と名くる如來。<sup>(48)</sup>離垢眼と名くる如來。<sup>(49)</sup>山王聲音と名くる如來。<sup>(50)</sup>華光と名くる如來。<sup>(51)</sup>華雨妙散と名くる如來。<sup>(52)</sup>寶蓋と名くる如來。<sup>(53)</sup>蓮影作美と名くる如來。<sup>(54)</sup>栴檀香と名くる如來。<sup>(55)</sup>多揭羅香と名くる如來。<sup>(56)</sup>照寶と名くる如來。<sup>(57)</sup>輪縁と名くる如來。<sup>(58)</sup>大莊嚴と名くる如來。<sup>(59)</sup>離恨瞋と名くる如來。<sup>(60)</sup>梵音と名くる如來。<sup>(61)</sup>七種寶降雨と名くる如來。<sup>(62)</sup>大功德持と名くる如來。<sup>(63)</sup>大多摩羅葉栴檀泥と名くる如來。<sup>(64)</sup>華神通と名くる如來。<sup>(65)</sup>破無智と名くる如來。<sup>(66)</sup>有髻と名くる如來。<sup>(67)</sup>眞珠蓋と名くる如來。<sup>(68)</sup>金藏と名くる如來。<sup>(69)</sup>吠瑠璃藏と名くる如來。<sup>(70)</sup>大幡と名くる如來。<sup>(71)</sup>法幡と名くる如來。<sup>(72)</sup>寶吉祥と名くる如來。<sup>(73)</sup>人帝と名くる如來。<sup>(74)</sup>世帝と名くる如來。<sup>(75)</sup>有慈悲者と名くる如來。<sup>(76)</sup>世美と名くる如來。<sup>(77)</sup>梵幡と名くる如來。<sup>(78)</sup>法慧と名くる如來。<sup>(79)</sup>師子と名くる如來。<sup>(80)</sup>師子慧と名くる如來は在しき。」

(6) 「阿難陀よ、師子慧如來の前の尙前に於て、<sup>(81)</sup>世自在王と名けらるゝ如來應供正等覺者、具智足、善逝、世間解、丈夫調御、無上<sup>(上)</sup>、諸人天の師、覺者世尊は世に出でましき。」

(7) 「阿難陀よ、彼の世自在王如來、應供正等覺者の教の中に於て、極めて念を具し、慧を具し、解を具し、智慧を具し、精進を具し、大信解ある法藏<sup>(Chos-kyi hidyun-gnas)</sup>と名けらる比丘は

出で給ひき。」

(8)「爾の時阿難陀よ、彼の法藏比丘は座より起ちて、上衣を一肩にかけ、右膝の輪を地に着け、彼世尊世自在王如來の所に合掌稽首し、世尊を敬禮し、その時此諸頌を以て眼前に讃嘆し給ひて曰く。」

(一)「光りは量りなく、覺慧は無邊に等しく、

他の光りは總て明からず、

日月寶聚の諸光も、

俱に一切世間に輝くことなし。

(二)最勝有情の色は無邊なり、

是の如く佛陀の説は無邊の音(あり)、

戒も定も智も精進も亦(然り)、

汝に似たるものは此世間に於て他にあるなし。

(三)深くして甚廣の法を得たる、

最上覺者の心は海の如し、

是に由て亦師は高貢を有せず、

恨と恚を離れて彼岸に達し給へり。

(四) 如何に最上覺者の無邊の威光は、

人王を耀かし、(一切諸)方を照らし給へるよ、

是の如く我も亦佛陀法王となりて、

群生を能く生死より解脱せしめん。

(五) 布施と調禦と戒律と忍辱と精進と、

靜慮と等持と是の如き最上智慧と、

是等の誓を我は如實に受けて、

一切有情を救ふ佛陀とならん。

(六) 最上四菩提を無等に求めつゝ、

百千俱胝の(數)多き覺者、

恒伽(河)の如き無邊なる、

彼の一切尊を我は供養せん。

(七) 恒伽(河)の砂に等しき世界、

それより一層無邊なる諸國、

それ等の一切に光りを能く放つべく、  
是の如き精進力を發起すべし。

(八) 我は國を廣濶、高貴最上第一(にし)、

この有爲の中に於て嚴飾して、

等しからざる涅槃(界)の安樂は、

是れ亦(他に)あらざれば(我は)完全に成就せん。

(九) 十方等より來集の諸有情は、

彼處に來集せば速かに安樂を歡ばん。

かの(無)量の佛陀は我の力なり、

不退の精進力を發生せんことを求む。

(一〇) 十方の世間に不着の智を有する、

それ等の賢者は常に我が心を知り給ふ。

我は無間にありて常に住すとも、

願力より退くことなかるべし。」

(8) 「爾の時阿難陀よ、彼法藏比丘は世尊世自在王如來に是等の偈を以て面前に於て現かに讚して、

是の如く宣へ給へり。世尊よ、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者たらんを欲し、屢々無上正等覺に心を發し、全く廻向 (Sara-pa 發願) をなせば、如何にしても尙我は速かに無上正等覺を現かに成就せる覺者と、世間に於て無等の如來と等しくなり得べき、是の如き法とを世尊よ我に善く教、給へ。諸相を以て我は佛國の功德の完全なる嚴飾莊嚴を全く攝取し得べき、その(諸)相を又世尊よ、我に残りなく説き給へ。」

- (9) 「阿難陀は是の如く願ひしに、世尊世自在王如來は、彼法藏比丘に是の如く告げ給へり。是の故に比丘よ、汝自身に依て佛國の功德の完全なる嚴飾莊嚴を残りなく執持せよ。彼(法藏比丘)は宣へり、世尊よ、我は表白する能はず、他諸如來の佛國の功德莊嚴の總て完全なる嚴飾を聞きて我の一切嚴飾莊嚴をして全く成就せしむべく世尊よ説き給へ。」

- (10) 「爾の時阿難陀よ、彼世自在王如來應供正等覺者は彼比丘の思惟を知り、義を欲し、利を欲し、慈悲を有し、哀愍を隨攝し、覺者の方法は不斷なるが爲めに諸有情に向て大哀愍を起し、滿俱胝年間に於て八十一俱胝尼由他の佛國の功德の完全なる嚴飾莊嚴(の)相(種類)と共に、國方と共に、何の根源に由て成りしやと共に、如實に善く説き給ひけり」

- (11) 「爾の時世尊に長老阿難陀は是の如く問へり。世尊よ、彼世自在王佛の身壽の量は如何程得給ひしやと。斯く問ひしに、世尊は長老阿難陀に是の如く告げ給ひき。彼世自在王如來の壽量は滿

四十百千俱胝尼由他劫を得給へり」

(12) 「爾の時阿難陀よ、彼法藏比丘は、彼の八十一百千俱胝尼由他の諸佛の佛國のあらゆる是等一切

の切徳の完全なる嚴飾莊嚴を一佛國に總て攝取して、彼世尊世自在王如來の足下に叩頭禮拜し團繞して彼の世尊の傍より退きたり。尙又五劫に於て、昔十方の一切世間に於て未だ嘗て生ぜざる甚廣なる、甚勝なる佛國の功德の完全なる嚴飾莊嚴を残りなく攝取して、尙甚廣なる誓願を發起し給へり」

(13) 「阿難陀よ、彼世尊世自在王如來に依て總て稱讚せられたる彼八十一百千俱胝尼由他の彼諸佛の

完全なる國よりも、更に甚廣なる、甚勝なる、甚無量なる、完全なる佛國を總て攝取し、彼世尊世自在王の所に前進し、彼世尊の足下に叩頭禮拜して、是の如く問へり。世尊よ、我は佛國の功德の完全なる嚴飾莊嚴を全く攝取せりと」

(14) 「阿難陀は是の如く問ひしに、彼世自在王如來は、彼法藏比丘に是の如く告げ給ひき。是の故に

如來も亦隨喜し給り。比丘よ説け、是は時なるに由て會衆をして歡ばしめよ、喜を生ぜしめよ師子の聲を吼へしめよ。それを聞きて諸大菩薩は現在及び未來の時に於て、是の如き完全なる佛國の誓願の住處位置を残りなく持し、全く完全に爲すべし」

「爾時阿難陀よ、彼法藏比丘はその時、彼世尊に是の如く宣べ給へり。是れが爲めに如何に我は

無上正等覺を現かに成就せる覺者となれるとき、彼佛國は不可思議功德の嚴飾莊嚴を具すべし  
(是れ)我の特殊の誓願なり、世尊よ願くは我に聽き給へど」

(一)世尊、設し我が彼佛國に地獄有情と、畜生の生處と、餓鬼の國と、阿修羅の形體とあらば、その間は我は無上正等覺を成就せる覺者とならず。

(二)世尊、設し我が御國に諸有情の生せんに、彼等は其(處)より死去して、地獄有情、或は畜生の生處、或は餓鬼の國、或は阿修羅の形體に墮することあらば(原文云、は不用)、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(三)世尊、設し我が彼佛國に諸有情の生せんに、彼等一切は是の如く金色にまで同一色とならずばその長き間に於て我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(四)世尊、設し我が彼の佛國に天と人との別異などあらば、(例へば)他の(國)中に於て、唯俗(諦)の名目に於ける名と符號とを以て天と人と云へる數を除きて、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(五)世尊、設し我が彼佛國に諸有情の生せんに、彼等一切のものは、若し縱令心の刹那、刹那に於て、百千俱胝尼由他の佛國を超越すべき神通力の最上彼岸に到らずば、その間は我は、無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。



(六)世尊、設し我が彼佛國に諸有情の生せんに、彼等一切有情は、縱令百千俱胝尼由他劫波を憶念すべき宿命(通)を念じ(得られ)ずは、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(七)世尊、設し、我が彼佛國に諸有情の生せんに、彼等一切は、縱令百千俱胝尼由他の世界を見るべき天眼(通)を得ずんば、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(八)世尊、設し、我が彼他國に諸有情の生せんに、彼等一切は、縱令百千俱胝尼由他の佛國に於て同時に法を聞くべき天耳(通)を得ずんば、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(九)世尊、設し我が彼佛國に諸有情の生せんに、縱令百千俱胝尼由他の佛國に屬する諸有情の心行を全て求むべく、他心(通)を求むるに熟達せずんば、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(一〇)世尊、設し我が彼佛國に諸有情の生せんに、彼等一切は、縱令又自身に執着、或は想を起さばその間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(一一)世尊、設し我が彼佛國に諸有情の生せんに、彼等一切は大涅槃に至るまで、是の如く如實性を決定せずんば、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(三)世尊、設し我れ無上正等覺を現かに成就せる覺者となるとき、彼佛國の或有情は、諸聲聞の量數を得べく示さば、縱令三千大千世界に屬する一切有情は覺者となりて、百千俱胝尼由他劫波を算じつゝ、尙その數を得べくんば、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(三)世尊、設し我れ無上正等覺を現かに成就せる覺者となるとき、彼佛國に我の光は、縱令又百千俱胝尼由他の佛國の數量を有すべくば、その長き間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者にならず。

(四)世尊、設し我れ無上正等覺を現かに成就せる覺者となるとき、彼佛國中に於て願力に（由るものを）除き、諸有情の壽量に（限）量あらば、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(五)世尊、設し我れ覺を得たるとき、壽量は縱令尙百千俱胝尼由他劫波を算へて終りに達すべくんば、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(六)世尊、設し我れ覺を得たるとき、彼佛國に於ける諸有情に尙不善の名あらば、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(七)世尊、設し我れ覺を得たるとき、無量の諸佛國に於ける無量無數の（諸）佛世尊は、我が名を全

く稱 (bRjod-pa) せず、或は讚嘆を稱せず、或は頌詞を稱せず、或は讚稱を稱せずんば、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(二) 世尊、設し我れ覺 (Byan-Chub) を得たるとき、他の諸世界の諸有情は、無上正等覺に心を發起し (Sems-bSkayed-Nas) 我が名を聞えり (bDag-Gis Min Thos-Te) 心に能 (至て) 信するが故に (Sems Rab-Tu Dad-par Gyrul-La) 我を憶念 (bDag Rjes-sudDrau-Pa) するに、設し彼等は臨終の時の近づくとき、我は比丘衆に繞繞せられ、前に居並び、前に於て是の如く散亂せざる心に由て住立せずば、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(三) 世尊、設し我れ覺を得たるとき、無量無數の諸佛國中の諸有情は、我が名を聞きて彼佛國に生れんが爲めに (Skye-Bar bGyi-Bu'i Slad-Du) 心を放ち行かして、亦諸善根 (徳本) を總て廻向せむ (Yons-Su Sio-Bar bGyid-Na) 「無間 (業) を作り、正法を斷棄す (るに由て) 障礙する諸有情を除きて」設し彼等は十心發起に依て (Sems-bSkayed-Pa) bGyur-Ba bCus) 彼佛國に生れ (Shin-Der Skye-Bar) ずんば、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(四) 世尊、設し我れ覺を得たるとき、彼佛國に諸有情の生せんに、彼等は皆大人の三十二相を具せずんば、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(五) 世尊、設し我れ覺を得たるとき、彼佛國に諸有情の生せんに、菩薩摩訶薩の大鎧を被り、一切

世間の義(Don)の爲めに鎧を被り、一切世間の義を勤修し、一切世間を總て苦惱より退轉せしむる爲めに確かに勤修し、一切(諸)佛に奉仕せんと欲し、恒伽河の砂量の有情が無上正等を思惟せんと欲し、尙其上の行に向て轉じ、普賢の行に(Cpyod-pa)依て定んで生ずる(Nos-par Byun-pa)諸の別願を除きて、彼等一切は無上正等覺に一生繫着せられずんば、その間は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(三)世尊、設し我れ覺を得たるとき、彼佛國に諸有情の生せんに、彼等一切は一晨朝の間、他の諸佛國にあつて、數百の佛と、數千の佛と、數百千の佛と數俱胝の佛と、乃至數百千俱胝尼由他の佛は、是の如く、佛の威力に由て一切樂融を以て尊敬供養し得ずんば、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(三)世尊、設し我れ覺を得たるとき、彼佛國中の彼諸菩薩は、是の如く黄金或は銀或は摩呢或は眞珠或は碧玉貝或は玻璃或は珊瑚或は水晶、或は玉或は金剛石或は赤眞珠等の如何なる適當なるものも、一切寶或は華と燒香と鬘と塗油と薰と酪灯と株(香)と衣服と傘と幢と幡と一切燈と詠歌と舞技と音樂と、尙如何なる種類をも求めて、乃至諸善根を生ず(植ゆ)る是の如き種類を、彼等は心を發起する (Sems-bskyed)や、否是等を生ぜずんば、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(四) 世尊、設し我れ覺を得れるとき、彼佛國中に諸有情の生せんに、彼等一切は一切智性を有する教令を話し得ずんば、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(五) 世尊、設し我れ覺を得たるとき、彼佛國中の諸菩薩は是を思惟するに、我等は此世界に住しつゝ、無量無數の諸佛國中の諸佛世尊を、是の如く衣服と飲食と臥牀具と治病藥と諸資具と華と焼香と香と鬘と塗油と粉(香)と衣服と天蓋と傘と焼香と幢と幡と詠歌と舞技と音樂と異種寶の諸雨を以て尊敬し、無上にし、恭敬し、供養せんとの心を發起せんに、彼等が心を發起する(*Samabhisekyē*)や否、是の如く諸佛世尊は哀愍攝取して、是等の供物を納受せずんば、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(六) 世尊、設し我れ覺を得たるとき、彼諸佛國に諸有情の生せんに、彼等一切は那羅耶那(*Nārāyaṇa*, *Sred-Med Kyi Bu*)と、金剛の如き堅き身體と力とを得ずんば、その間は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(七) 世尊、設し我れ覺を得たるとき、彼佛國中の莊嚴色を或は有情は、又天眼を以て邊際を見んにこの佛國の光耀は是の如きものなり、色は是の如きものなり、財寶は是の如きものなりと、かく諸の異色を求めえずんば、その間は、我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(八) 世尊、設し我れ覺を得たるとき、彼佛國に於ける一切の中より、諸菩薩が善根を以て菩提樹の

殆ど千六百由旬那の高さを求めえんば、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(元)世尊、設し我れ覺を得たるとき、彼佛國中の諸菩薩は教令を受け、讀誦をなさんに、彼等一切は各清淨智をえんば、その間は或は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(三)世尊、設し我れ覺を得たるとき、彼佛國に諸有情の生せんに、彼等一切は無邊の智慧と、無邊の辯才(Spos-Pa)を得ずんば、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(三)世尊、設し覺を得たるとき、彼佛國中の何處にても、普く無量、無數、不可思議、無等、無比等の總てにある(諸)佛國は是の如し、譬へば、分明なる鏡輪に(映る)如く、是の如き輪圓の光明體にならずんば、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(三)世尊、設し我れ覺を得たるとき、彼佛國に於て地上より取りて虚空に至るまで、人天の境界を能く超えたる好種の燒香を如來と菩薩とに供養するに適當なる妙香の種々の寶を以て作られたる百千瓶が常に薰せらるゝにあらずんば、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(三)世尊、設し、我れ覺を得たるとき、彼佛國中に妙香を有する種々の華雨は常に降り、音樂の音聲、愉快なる聲が常に雲中に發せずんば、我は正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(四) 世尊、設し、我れ覺を得たるとき、我が光明を以て無數不可思議無等の諸世界に於ける諸有情を明照にせんに、彼等一切は、人天に超えたる快樂を具せずんば、その間は我は無上正等覺を成就せる覺者とならず。

(五) 世尊、設し我れ覺を得たるとき、普く無量、無數、不可思議、無等、無比量の諸佛國に於ける諸菩薩は、我が名を聞きて、聞くや否、生ずる善根を以て生の後とより、菩提心 (Byañ-chuk-kyi Shin-Po) の究竟に至るまで、總持 (Gzuts, Dharani) を得ずんば、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(六) 世尊、設し我れ覺を得るとき、普く(無量)、無數、不可思議、無等、無比量の諸佛國中の諸女人は、我が名を聞きて至心を生じ (Rab-Tu Dad-Pa Skyes) 菩提心を發起し、女人の身を厭はんに、彼等は生後に於て再び女人の身を得べくんば、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(七) 世尊、設し我れ覺を得るとき、無量、無數、不可思議、無等、無比量の諸佛國中の諸有情は、我が名を聞かんに、名を聞くのみに由て菩提心の究竟に至るまで清淨に行せずんば、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(八) 世尊、設し我れ覺を得るとき、普く無量、無數、不可思議、無等、無比量の諸佛國中の諸有

情は、我が名を聞かんに、五肢を以て敬禮し、稽首し、彼諸菩薩の行を行するが故に、天と共に  
なる世間に依て尊敬せられずば、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(五)世尊、設し、我覺を得たるとき、彼佛國に於て諸菩薩は法衣を洗ひ、或は乾潔し、或は刺繡し  
或は料量の作業を作さんに、新寶法衣、妙種なる廣牀を如來に依て與へられず、我は心を發起  
するや否、着服すべく、我は願はずんば、その間に於て我は無上正等覺を現かに成就せる覺者  
とならず。

(六)世尊、設し、我れ覺を得たるとき、彼佛國に諸有情の生するや否、是の如く猶比丘阿羅漢が全  
く苦痛なく、是の如き第三靜慮に入定するが如く、是の如き種々の快樂を得ずんば、その間は  
無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(七)世尊、設し我れ覺を得たるとき、彼佛國に諸菩薩の生せんに、是の如き諸佛國の種々功德の嚴  
飾莊嚴を欲求するが如き諸種類の種々の寶樹より求め(見)得ずんば、その間は我は無上正等覺  
を現かに成就せる覺者とならず。

(八)世尊、設し我れ覺を得たるとき、他の諸佛國に生する(諸)菩薩は、我が名を聞きて障礙の根を  
得ることあらば、その間は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(九)世尊、設し我れ覺を得たるとき、他の佛國中に住せる(諸)菩薩は、我が名を聞くや否、善く完



全に分別すと名くる三昧耶を得ずんば、且つ菩薩の彼定に住して一瞬間を過ぐるのみにて、無量、無數、不可思議、無等、不可比量の諸佛世尊を見て、彼定の中間に盡きざる力を求め得ずんば、その間は無上正等覺を現かに成就せる覺者もならず。

(四) 世尊、設し我れ覺を得たる時、諸有情は我が名を聞かんに、聞くや否や、生ずる善根を以て諸有情は、菩提の究竟に達するまで善家の種(族)に生ずるを得ずんば、その間は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(五) 世尊、設し我れ覺を得たる時、是れより餘の諸佛國に於ける諸菩薩は、我が名を聞かんに、それを聞くや否生ずる善根を以て菩提の究竟に達するまで一切菩薩の行に於ける歡喜と、最勝歡喜の善根とに會し得ずんば、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(六) 世尊、設し我れ覺を得たる時、是れより餘の諸佛國に於ける菩薩は、我が名を聞くや否、「普く隨去」(kun-Gyi Rjes-su-Son-Ba) と名くる定を得ずんば、且つ諸菩薩がその定に住して殆ど一刹那を過ぐるのみにて、無量、無量、不可思議、無等、無比量の諸佛世尊を恭敬して、その定より菩提藏(心)の邊りに達するまで、盡きざる力を求めずんば、その間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(七) 世尊、設し我れ覺を得たる時、彼佛國に諸有情の生ぜんに、彼等は是の如き種々の教法を聞

き求むるが如き種々の教法に心を發起するや否、聞きえずんば、その間は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(六)世尊、設し我れ覺を得たるとき、餘の諸佛國に於ける諸菩薩は、我が名を聞かんに、彼等は我か名を聞くや否、無上正等覺より後とに退轉せざるべくならずんばその間は我は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず。

(七)世尊、設し我れ覺を得たるとき、餘の諸佛國に於ける諸菩薩は、我が名を聞かんに、彼等は我が名を聞くや否、第一、第二、第三の忍を得ずんば、且つ諸佛の法より後とに退轉せざるべくならずんば、その間は無上正等覺を現かに成就せる覺者とならず」

(八)爾の時阿難陀よ、彼法藏比丘は是の如きその諸種の別願を説き了りて、その時、佛の威力に由て是の諸偈を願ひて曰く。

(一)設し我れ覺を得たるとき、最上誓願は、

是の如き殊勝の種(類)とならずんば、

(我は)十力を有する無等の布施の所住者、

人の獅子、有情の心(藏)とならざるべし。

(二)設し我の國は是の如き種(類)とならずんば、

多くの貧窮なる有情に多くの財寶を與へ得ずんば、

苦しめる諸人をして安樂ならしめずんば、

我は人の希有最勝王とならざるべし。

(三) 設し我は菩提心(Brahma-Chaitanya-Sattva)に近づきたるを、

諸方隅の廣大無邊の多くの諸國に、

名(稱)は有名とならずんば、

我は有力なる世界主とならざるべし。

(四) 設し我れ無等寂靜なる菩提を求めんに、

念(Dharma)と慧と悟とを全く捨て、

愛欲の享樂を修するならば、

我は力を有する世界の師とならざるべし。

(五) 無等、無邊の廣大なる光に由て、

方と方隅の主なる佛國を遍く覆ひ、

一切貪欲、瞋恚、愚癡を能く消除し、

地獄有情趣の諸火を消除せん。

(六) 甚美にして廣大なる眼を開き了りて、

一切諸人の冥闇を完全に明かにし、

諸の慰安なきものを残りなく明かにし、

無邊光耀の天道に攝取せん。

(七) 昔の全て清淨なる行を修了して、

空の日月の光りも道(を照らす)火とならず、

摩訶聚も、火も天の諸光といへども尚、

人獅の光りは一切の光耀を壓す。

(八) 最勝の丈夫となり、諸苦者の寶となり、

諸方に於て是に似たる身はあることなし、

百千の諸善を能く成滿し、

衆會中にありて佛の獅聲を咆吼せん。

(九) 昔の諸「自覺せる勝者」(Royal-Ba Rat-Bhū)を恭敬し、

無量千萬の誓と苦行とを修し、

最上殊妙の智蘊を能く求め、

願力(Smṛti-Jam Stobs)を成滿して有情の心(藏)とならん。

(十)如何に無着の智見を有し給ふ世尊は、

人の主にして、三種の有爲を知り給ふ(如く)、

我も亦無等なる所施者と智者と

諸人中の人の最勝導師とならん。

(十一)人の主よ、我は菩提を能く得る後ち、

若し是に似たるこの諸誓願をかく成就せば、

この(大)千世界は非常に震動し、

天衆は空中より華雨を降らせ。

(十二)地は亦非常に震動し、華雨も亦降り、

空中より亦諸の伎樂の聲は生じ、

天の妙なる栴檀の香粉も亦、

現かに散されて世間(に於ける)覺者となるべしと」(原文P. B. 270  
— L. B. 283.)

## 第二章

(1) 阿難陀よ、彼法藏(Chos-kyi lByung-nae)比丘大菩薩は、是の如き諸完全なる誓願を具足したり。阿難陀よ、是の如き完全なる誓願を具足せる菩薩少し。是の如き諸誓願の世間に出づること少し。少くして滅せるも、全く無きにはあらず」

(2) 阿難陀よ、彼法藏比丘は彼の自在王如來の眼前に於て、天と俱なる世間、魔と俱なる、梵と俱なる、沙彌と婆羅門群生と俱なる、天と人と阿修羅と俱なる前に於て、是の如き諸の種類の特殊の誓願を教示して、如何に如實の如く成就に住し、是の如き是等の全く清淨なる佛國と、大佛國と、種々廣大なる佛國とを成就し、菩薩の行を行じ、無量、無數、不可思議、無等、無比無量稱なる百千俱胝尼由他の年の間、更に欲と瞋と、害との完全なる考(尋)へを以て全く考(尋)へを起さず、更に或間は欲と瞋と害との想を起さず。更に或間は色と聲と香と味と觸との想を起さず。彼青年は眞實に伴侶に於て平和と信とを受べき自性を有し、和樂と撫慰と少欲と知足と謙讓と無瞋と無癡と、不劣と、無動と無幻と、善性と溫順と愛語と、常精進と白法とを全く求めて精進して棄てず。一切有情の義(Dōn)の爲めに大誓願を如實に成就し、佛と法と軌範師と親教師と善友とに尊敬を以て菩薩の行に常に甲冑を被り正直と溫順と無偽と無諂と有徳にして一切有情をして一切善法を持せしめん爲めの前進者なり。空と無相と無行と無生(Skye-Ba Med-pa)と無滅(hGag-pa Med-pa)との所住に住し、慢なくして善く護り、菩薩の行を修するに、

それに由て是の如く自他及び彼此を害する口業の發生を捨て、自他及び彼此を利益する口業を勵めり。是の如く正智を有し、村落と都城と都府と國邊と王城の諸聚に入るとも、決して色と聲と香と、味と觸と法とに於て貪と瞋とはなきなり。彼は菩薩の行を修するに、自から布施の波羅密を行し、又他をして如實に(之に)入らしめき。又自から戒と忍と精進と三昧耶と般若波羅密多とを行し、又他をして如實に(之に)入らしめき。あらゆる(果報を)具して隨處に生ずるそこには百千尼由他の諸財寶が地より生ずが如き諸善根を如實に成就せり。彼は菩薩の行を修して、無數、無量、百千俱胝尼由他の有情は口業を以ては達し易からず、彼の量の有情をして無上正等覺に安立せしめたり」

(3) 彼は無量、無數量の佛世尊に衣服と、飲食と、夜具と治病藥と資具と一切安穩とを供給し、觸住せしむるものを以て恭敬し、尊重(無上に)し、奠供して、供養せり。げに多くの有情に能く布施し、長老と家主と大臣と王族と婆羅門とを大婆羅樹の如く能く安立せしめ、彼等は言語を以て示説するに究極に達すること容易ならず。是の如く閻浮洲の自在者と、轉輪王と、護世と因陀羅と蘇夜魔と觀史多と善變化と他化自在天と、天王と大梵とに能く安立せしめたり。彼は無量、無數量の佛世尊を恭敬し、無上にし、奠供し、供養し、法輪を轉ずる爲めに願を起せり。彼(の量)は口業の説示を以て究極に達すること容易ならず」

(4) 彼は菩薩の行を修するに於て、無量、無數、不可思議、無等、不可計、不可量、不可說なる百千俱胝尼由他の間、口業よりも天業よりも超越したる栴檀の如く能く混合せる芳香は發し、一切毛孔より優曇華の香は發し、一切世間に於て形色瑞美にして顔容殊妙に、廣大最勝の妙色を具し、圓滿なる相と好とに依て體は善く嚴飾せられ、その一切寶の嚴飾とを現かに完全に成就せられたる一切の衣服と、法衣と一切華と、燒香と、薰香と、鬘と塗香と傘蓋と幢と幡と、又現かに成就せる一切の伎樂の譜音と詠歌とは、一切の毛孔及び兩手より出でたり。又現かに成就せる一切の食料と飲料と嚼食と吞料と、舐料と味料と、現かに成就せる一切の受用と、總具とは兩手より漏出したり。是の如き種類の徳を如實に成就せり阿難陀よ。是の如く、彼法藏菩薩は昔菩薩の行を修じて、一切の資具に於て自在の彼岸に達し給へり」